瀬名姫通信 ③

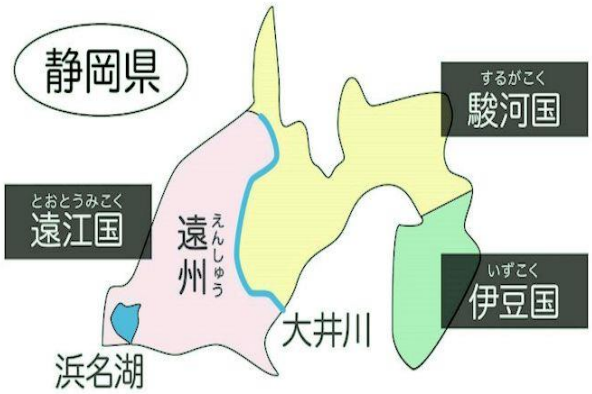
2023. 6. 22 作成:歴史よもやま話「193」

瀬名姫の、お母さんの話しです。

「瀬名姫の誕生と家康の幼少期」

遠江国（静岡県西部：大井川以西）　井伊谷　三岳城から、今川軍を引きあげる条件として、人質を出すことになった。その人質として城主直平はひとり娘の**水名（瀬名の母）**を選びました。

「水名すまぬ、・・・」わびる父を見て、水名は「いやです」とは言えませんでした。水名は今川に人質になるため、駿河国、駿府へと泣きながら。むかいました。



三岳城　跡

駿府に行った水名は、その美しさが、今川家当主、義元にみとめられ、**側室**に迎えられることになりました。今川は井伊の敵だったという思いがあり、どうしても義元に打ち解けることができません。「ただの人質ではなく、慰み者にされるなんて・・」　そんな自分が哀れで哀れで・・井伊家のために我慢するしかありませんでした。ある日、水名は**義元の母（寿桂尼）**に呼ばれ「水名殿、あなたをぜひ嫁にほしいという方がいるの、わたくしの養女になって、その方に嫁いでくれないかしら」水名の相手は、今川の瀬名氏三代目氏俊の弟の氏広でした。氏広は関口家の養子（他人のこどもを自分のこどもにすること）となり**関口刑部親永**と名のりました。その後、天文１１年（１５４２）水名は、瀬名館で玉のように美しい女の子を生みました。幼少名「おふく」その後生まれた地にちなんで**瀬名**と名ずけられた「この子は美しい子になるだろう」と我が子を抱いた親永は嬉しそうでした。その様子を見ていた水名は**「この人に嫁いでよかった」**とあらためて思いました。

その後、親永は、持舟（用宗）城、２万６千石の城主になりました。

松平竹千代（のちの家康）が人質として駿府に来たことが噂になりました。「三河のこせがれが人質として来たそうだ」「あの一千貫文で織田に売られたという奴か」「いやいや、百貫文だったそうだ・・」「どっちでもいいが、義理とはいえ、身内に裏切られたわけだろう」「ああ、あわれだよな」この話題で持ち切りでした。この噂は、瀬名の耳にも届いてきました。「百貫文で売られた？それに身内に裏切られたって・・かわいそうな子ね」　竹千代が駿府に来てから１年後の天文１０年の元日、毎年恒例の今川館での祝儀からかえってきた父の親永から、こんな話しを聞きました。家臣たちが義元様のお出ましを待っているときに「あれは、どこの子だ？」「もしかして、あれが松平清康の孫か」「いやいや清康の孫ならもっと，凛々しい顔をしておるのではないか」などと口々に噂していると、竹千代がすっくと立ち、縁先に出ると、いきなり小便をしはじめたというのです。これを見た家臣たちは、「いつ義元様がおいでになるかわからないのに・・」「豪胆（度胸がすわっている）な子だな」「ああ　あれこそ、まさしく勇猛果敢（勇気があり、思いきって実行する）で知られた清康の孫だ」と関心して、ひそひそ話をやめたといいます。

「皆の前でそんなことを」母の水名と瀬名が顔をしかめると、親永が笑いました。　　**臨済寺**

「私の結婚相手は、どなたですの？」「松平元信殿だ」「ええっあの変り者の人質の三河のこせがれ？」がっかりする瀬名に、親永は、「元信殿は将来有望な若者だ子どもの頃から義元様の師でもある臨済寺の太原雪斎様の教えを受けて育ち、頭のいい子」だと話し、義元様が決めたと話し、「伯父上様が見込んだ方なら・・」と微笑んで見せると、親永がほっと胸をなでおろしました。

こうして瀬名が元信（家康）に嫁ぐことが決まったのです。

瀬名姫通信	：藤咲あゆな「戦国姫　瀬名姫の物語」より
作成：編集	歴史よもやま話「１９３」　伊久美勝久　℡０９０－６５８３－２９４５